

英語専門領域の紹介

1. 英語専門領域が輩出する人材

英語専門領域は、これまでに多くの優れた英語教員・小学校教員を輩出しています。卒業生には、学校や地域をけん引するリーダー的な教員、教育委員会に引き抜かれて指導的な立場になった教員が多くおり、教育現場から高く評価されています。教員採用試験の受験者はほとんどが合格しており、全国トップクラスの英語教員養成講座と言えます。

2. 英語専門領域で学べること、研究すること

英語専門領域では、ことばとしての英語やその習得、英語をとりまく文化や歴史、英語コミュニケーション、英語教育に関する諸課題、について学び研究することができます。そのための専門科目を開講しています（『履修の手引き』を参照）。

3. カリキュラム

教科教育コースの「英語」にかかわるカリキュラムは、中学校・高等学校の「英語」の教員免許の取得を前提にして組み立てられています。中学校・高等学校「英語」第1種免許状の取得には、英語科の開講科目から、以下の必修単位に加えて8単位以上の修得が必要です。

英語学（4単位）、英語文学（2単位）、英語コミュニケーション（4単位）、異文化理解（2単位）、教職関連科目（英語教育）（8単位）

小学校の「外国語活動」「外国語」については、小教専および初等教科教育法（教育学部生全員が必修）で学ぶことが出来るのに加えて、英語領域でのゼミ指導・卒業研究で取り組むことが出来ます。

4. 英語教育講座所属教員と専門分野

田中秀毅：英語学

斉田智里：英語教育学

大場貴志：第二言語習得論・英語教育学

高瀬祐子：英語文学（アメリカ文学）

小竹空翼：小学校英語

Arora Swati：国際関係論・外国語教育・国際理解教育

以上の6名の他に、非常勤講師（Andrew Boerger：英語コミュニケーション論）が専門科目を担当します。

5. 英語専門領域で修得できること

教科教育コースの「英語」を専門領域とした場合には、以下のような知識と能力を修得

することができます。もちろん、「それなりの努力をしたら」という条件付きです。

- (1) 第二言語としての英語の習得と英語教育に関する知識・研究・実践力
- (2) 英語についての言語学的な知識と研究能力
- (3) 英米の文学・文化についての知識と研究能力
- (4) 英語によるコミュニケーションの能力

6. 教員からのメッセージ

おおば たかし
大場 貴志(英語教育専門)

英語を教えるためには、英語の仕組み（英語学・音声学）、英語圏の文化・文学、言語を習得するメカニズムや習得に与える諸要因（第二言語習得論: Second Language Acquisition [SLA]）、教科教育法（指導法）など、幅広い分野の学問を通じて英語教師の基盤を育成するのが英語教育領域です。私の専門は第二言語（外国語）をどのように学び習得するのが学習者にとって効果的かを科学的に実証する学問である第二言語習得論です。特に教室内での文法指導や内容重視の指導法（CLILなど）に関心があります。また、中学校での教員経験を生かし、効果的な指導技術を皆さんに伝え、理論と実践を兼ね備えた教員を養成してきました。SLA研究に基づいた指導法を研究し実践することは最先端な分野でもあり、学校現場に還元できるという大きなやりがいがある分野です。是非、英語教育のスペシャリストになるために一緒に楽しく学びましょう。各分野のスペシャリストが皆さんを全力でサポートいたします。



さいだ ちさと
齊田 智里(英語教育専門)

みなさんは、なぜ英語を学習していますか？英語学習の目標は何ですか？英語を使って何をしたいですか？みなさんが、英語の先生になったとき、どのような英語を教えたいですか？生徒たちにどのような英語の力を身につけてもらい、英語を使って何が出来るようになってほしいと思いますか？英語力って何でしょうか？例えば、読解力とか、文法力とか、語彙力とかが思い浮かんだとき、それらが具体的にどのような力なのか説明出来ますか？読むってどういうことなのか？文法や語彙の知識は何のためにあるのか？私は英語力とは何か、英語力をどのように測定し評価するのか、評価結果をどう教育や指導に活かしていくのか、という視点から、研究活動を進めています。英語力をどう測り、どう伸ばしていくのか、今や世界規模で研究が加速化、教育が過熱化しています。私は、その先にあるものは何か、に着目しています。みなさんには、英語を通して、社会を見る眼を養い、民主主義のよい担い手として、世界の平和に貢献する人になってほしいと切に願っています。



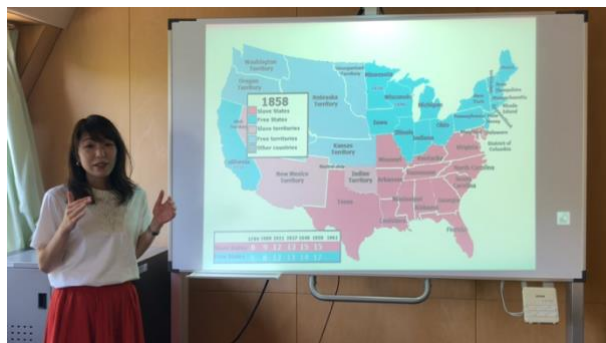
こたけ あいき
小竹 空翼（英語教育専門）

私の専門は小学校英語教育で、小学生に英語を教えるという仕事のおもしろさに魅せられ、実践と研究を重ねてきました。子どもたちは、大人が想像する以上に深く考え、試行錯誤しながら、初めて出会う外国語に立ち向かい、自ら学び取る力を持っています。その力を十分に引き出すことができるかどうかは、私たち指導者次第です。小学校で英語を教えるためには、児童期の言語習得についての深い理解と、その理解に支えられた指導技術が必要です。一朝一夕に身に付くものではありませんが、大学の4年間で根底となる考え方を身につけ、学び続ける教師として巣立ってほしいと願っています。子どもたちの言葉の使い手としての成長に立ち会える、とてもやりがいのある仕事です。英語領域でみなさんと共に学べることを楽しみにしています。



たかせ ゆうこ
高瀬 祐子（英語文学専門：専門領域代表）

教育学部「英語領域」と聞くと、教員になるために英語を教える方法を学ぶ場所をイメージする人がほとんどではないでしょうか？ しかし実際はそれだけではなく、ここでは英語学や英米文学、英語圏の文化など英語に関する様々なことを学ぶことができます。私の専門は19世紀のアメリカ文学ですが、授業ではアメリカやイギリスの文学作品を通して、文化、歴史、人種やジェンダーなど様々なことを扱っています。教員は日々児童や生徒にアウトプットする仕事です。そのためには、たくさんのことをインプットする必要があります。魅力的な教員になることを目指し、英語領域で幅広い知識や深い教養を身につけましょう。



たなか ひでき
田中 秀毅（英語学・言語学専門）

英語教育と聞くと教え方を思い浮かべる人が多いと思いますが、教える内容の理解も等しく重要です。私の専門は教える内容に関係します。具体的には、英語と日本語を語順や意味の観点で比較し、「英語らしさ・日本語らしさ」の解明をめざしています。たとえば、「ジョンはメアリーの目を見た」を英訳する場合、**John looked at Mary's eyes**と訳す人が多いと思いますが、**John looked Mary in the eye**と訳すこともできます。前者では見る対象が「（メアリーの）目」なのに対して、後者ではそれが「メアリー」になっています。つまり、後者は見るという行為によって影響を受ける＜全体＞を示してから視線が当たる＜部位＞を示す構文とみることができます。影響の受け手に注目するということは、それを感じ



受できるものが対象にならなければなりません。よって、人形のような無生物には当該構文は使いません。このように英語という言語の理解を深めていくことで「英語らしさ」を教えられる先生になってほしいと願っています。

Arora Swati（国際関係論・外国語教育・国際理解教育）



私の専門は非常に多岐にわたっており、これまで国際関係論、ビジネスマネジメント、そして英語教育に関する研究を行ってまいりました。特に、外国語教育や国際理解教育を通じた実践的な学びに関心を持っています。これまでの教育現場での経験では、高等学校での英語指導に携わっており、教室でのマネジメントや評価の作成、効果的な授業計画などを行ってきました。私は「教えることは学ぶこと」という信念のもと、実体験に基づいた実践的な授業を大切にしています。授業では、生徒が学ぶ喜びを感じ、授業が終わるたびに「もっと英語を学びたい」と思えるような工夫を心がけています。今後、皆様と

ともに学び合えることを心より楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。